

□ 次の文章を読んで後の各問に答えなさい。

僕は、子供の頃から、地面に関心がありました。そのことと、長靴ばかりはいていたこととは、関係があります。正確にいうと、長靴が好きだったわけではなくて、裸足で長靴をはくのが好きだったのです。もちろん晴れた日にもです。そうすると、①土の感触が直接足の裏に感じられて、とても幸せな、安らいだ気分になるのです。晴れた日に長靴で走り回る、ちょっとあぶない子供です。

さすがに晴れた日に、小学校には長靴で行くわけにはいきませんでした。アスファルトとコンクリートで土がカバーされた田園調布の街や小学校で長靴をはいても、そもそも楽しくありません。

その硬い場所から、やわらかい大倉山に帰ってくると、靴下を脱いで、黄色い長靴に足を突っ込んで、ジュンコちゃんちの裏の里山に突入するのです。そこは実際に、沢もあり、泥んこもあり、やぶもあつて、長靴は実用面でも役立ちました。しかしそれ以上に、精神面で、この黄色い長靴が果たした役割はとても大きかった。

ある女優が、どうやって役づくりをしますか、という質問に対して、「Aを変えます」と答えていたのが、とても印象的でした。

確かにAを変えると、自分と世界との関係性が変わったような気分になります。世界との関係性が変わるというのは、すなわち自分が変わることです。自分という確固としたものがあるというより、身体と世界との関係性こそが自分なのではないかと、僕は考えます。服にも世界との関係性を変える機能がありますが、靴のような直接性はありません。

小学生の僕は、黄色い長靴と、むき出しの足を媒介として、世界とつながろうとしました。なぜなら、生物にとって、世界というのはまず地面であり、床だからです。

そのせいか、今でも人のはいている靴が気になります。この人はどう世界とつながっているか、どう自然と接続しているかが、靴を通じてわかってしまうからです。靴に無神経な人とは、あまり友達になりたくありません。

その意味で建築はAに似ています。大地と身体を仲介するからです。

この黄色い長靴が最も役に立つのは、ジュンコちゃんちの裏の竹ヤブでした。この竹ヤブの急斜面を駆け上がるのが、大倉山の尾根に登る近道だったからです。尾根なんていっても、横浜の里山ですから、大した高さではないので、わざわざ近道をする必要もありませんが、この竹ヤブの斜面自体が、僕にとっては、たまたまなく魅力的だったのです。

まず、竹ヤブは、まったく別の種類の光で満たされていました。街とはもちろん違い、普通の森ともまったく異なる種類の、光と音と匂いとで満たされていたのです。さらにいいことに、小道もなかった。

道は人間の行動を規制しますが、この竹ヤブにはそういう縛りがなくて、身体は何物にも縛られず、まったく自由でした。竹につかまりながら登ると、どんな急斜面も少しも怖くないのです。②緑色をした水の中を泳いでいるようでした。

一応長靴ははいていたけれど、中はむき出しの裸足だったから、裸で水の中を泳ぎ回っているような感覚でした。重力をも克服して、自由に上昇し、下降し、そして水平に、斜めに、泳ぎ回るのでした。

③僕が竹を建築にしばしば使うことと、この竹ヤブ体験は、きっと関係があるのでしよう。僕の竹の使い方は少し変わっていると思います。竹を建築材料として使いたいというより、竹ヤブをそこに作りたいと、考えてしまうのです。

竹という材料ではなく、竹ヤブという状態なのです。竹の質感というよりも、竹ヤブの光と音と手触りなのです。

中国の万里の長城の脇に作った竹の家は、竹を徹底的に使った建築ですが、建築を作りたいというよりも、竹ヤブを作りたいという気持ちの方が強かった。

万里の長城のあたりは寒く、乾燥していて、最初に訪ねた時から、さびしい気分になってしまいました。そこに何とか、やわらかさと湿り気を持ち込めないだろうかと考えた結果が、あの竹の家です。

造成せずに、元の地面の勾配をそのままにしたのも、そこに建築ではなく、竹ヤブを作りたいからでした。

このやり方は、近くの万里の長城から学びました。万里の長城は、地面に手をつけなというルールで作った、巨大建築です。地面に手をつけたらきりがないことを、現実的な中国人はよくわかっていました。

竹の家の内部の床レベルもさまざまに変わるので、まるで竹ヤブを登ったり、すべり降りたりするような、無重力感があります。孔と呼んでいる部分には、水が張ってあって、大きな竹の箱の中に、さらに竹の小箱が浮いたような構成になっています。竹が重層し、*1入れ子になることで、空間に湿り気が生まれ、ヤブっぽさが生まれました。

中国には「竹林の七賢」という故事があり、竹ヤブは一種の反都市性、反権力の象徴として扱われてきました。僕の竹の家も、正確にいうと、「竹ヤブハウス」というわけです。B、Cとしての竹ヤブです。

北京オリンピックの時に、映画監督のチャン・イーモウが、この竹の家で、オリンピックのCMを撮影しました。田舎育ちのチャン・イーモウが、この竹ヤブハウスを気に入ってくれたのは、偶然ではないでしょう。

その後も竹を使う時は、いつも竹ヤブ的に使っています。浜名湖の博覧会（パシフィック・フローラ）のゲートパビリオン（2003年）は、天井から無数に竹が吊るされていて、まるで竹ヤブを通過して博覧会場に入るといった感じでした。竹ヤブの暗がりを通り抜けて、山の尾根の明るいところに飛び出していった、僕の子供時代の日常の再現です。

「根津美術館」（2009年）のアプローチも、竹ヤブです。根津美術館は、東京を代表するファッショナブルなストリートである表参道の突き当たりにあります。表参道の軽い気分から、根津美術館のちよっと落ち着いた気分へと転換するためのゲート、フィルターのようなのが必要だと考えま

した。それには竹ヤブしかないだろうと、設計の最初の時から考えていました。

昔の人は、鳥居とりい一つくぐるだけで、門一つ通り抜けるだけで、気分を転換できたのかもしれませんが、今の人間は鈍感になってしまったから、そうはいきません。子供の頃テレビで見ていたタイムトンネルと同じくらの、奥行きがあるゲートを通過させないと、**④気分転換ができない**と考えて、竹ヤブを用意したわけです。

正確にいうと、片側は本物の竹ヤブで、片側は竹で作った格子です。両側に竹があることが大事で、片方だけだと、竹ヤブ感が出てこないのです。この竹ヤブの通路の上に、大きな庇ひさしがかけてあるので、光は直接入らず、必ず右側の竹ヤブに濾過ろかされます。大倉山の竹ヤブと同じ、**D**の特
別な光で満たされます。

大倉山は、境界に位置していたせいで、**⑤生きた家**と死んだ家がありました。僕が生まれたのは1954年ですが、1960年代の大倉山では、死んだ家が、驚くほどの勢いで増殖ぞうじくしていました。

死んだ家は、芝生のお庭のある、白い家です。アルミサッシが出始めの頃で、窓枠もシルバーでピカピカです。インテリアは、ビニールクロス貼りで、蛍光灯が煌々きらきらと輝いていました。死んでいることを隠すために、つるつるして明るいのです。

僕の家だけは、まったく違いました。**a**、暗くてポロポロの、壊れかけた、木造の平屋です。サッシももちろん木製だったし、赤い色をした白熱電球のせいで、暖かかったけれど、暗かった。

父の祖父母は、長崎、大村の人間でしたが、父が子供の頃に、当時流行った結核で夫婦とも亡くなって、父は日本橋の瀬戸物屋を営んでいた親戚に預けられ、10歳の頃から、日本橋をウロウロしていました。

大倉山の家を作ったのは母方の方の祖父です。東京の大井で、開業医をしていました。人とはあまり口をきかない物静かな医者で、釣りにしか興味がないように見えました。

釣りにハマる前には、野菜を育てるのに興味があって、ジュンコちゃんのおじいちゃんとかけあって、小さな土地を借り、週末になると、開業していた大井から大倉山までやってきて、だまって土いじりをしていたそうです。**b** 小さな畑の脇に建てた小屋が、後で僕んちになった、というわけです。

祖父が家を建てたのは1933年。戦争直前の、まだのんびりとしていた時代でした。**c** 外壁も土壁だったし、インテリアも*2漆喰。その漆喰が割れて、ぼろぼろと崩れて、畳の上はいつもザラザラとしていました。父はガムテープをベタベタ貼って、**d** 壁の崩壊を止めていました。

このザラザラした畳の上で、僕は2歳の頃からずっと積み木遊びばかりしていました。何時間でも、よだれを垂らしながら、僕は積み木を続けていました。**⑥机の上に積み木を立ち上げるのではなく**、畳の上でゴロゴロと寝転びながら、小さな木製のピースを並べたり、組み立てたりすることが、僕にとっては無上の快感でした。

遊び終わると、そのまま畳の上で昼寝をしました。最初は、三原色に塗られていた木製の積み木が、次第に色が剥げ落ちてしまつて、畳の色と同化してしまいました。その畳と木とが融けた状態が、僕にとっての幸福でした。

小さな木のピースがバラバラと散らばった状態が、今でも僕の理想空間です。気に入らなかつたらすぐに壊し、ただの畳に戻せることが、僕にとっては重要でした。取り返しがつくからです。

僕は建築をやっているのに、いつまでたってもコンクリートがあまり好きになれません。コンクリートが、取り返しのつかない材料だからです。最初は水のように形がないくせに、一度固まったら、どうしようもなく重く硬い存在になって、もう取り返しがつかないのです。木造建築は逆に積み木的です。積み木とまではいきませんが、いつでも元に戻せるような気楽さがあります。

Eのように粒子状の物体がバラバラと散らばった状態のことを、今は少し気どつて、建築の*3デモクラシーなどと呼んでいます。日本の伝統的木造住宅はかなりデモクラティックです。誰もが建設に参加し、解体にも参加できる状態が、究極のデモクラシー建築です。コンクリートは反デモクラシーで、全体主義的です。
(限研吾『僕の場合』より)

注 *1入れ子いれこ 大きな箱や器の中に、それより一まわり小さくて同じ形のものを入れること。また、そのように細工された箱・器。

*2漆喰しっくい 日本独特の壁を塗る材料。和風の家の壁を塗るのに使われた。

*3デモクラシー 個人の人權(自由・平等など)を重んじながら、多数で物事を決める原則。民主主義と呼ぶ場合もある。

問一 ——部①「土の感触が直接足の裏に感じられて、とても幸せな、安らいだ気分になるのです」とありますが、なぜ土の感触が直接足の裏に感じられると、とても幸せな、安らいだ気分になるのですか。文中の語句を使って、四十五字以内で説明しなさい。

問二 本文中の**A**に入る漢字一文字の言葉を、文中より抜き出して答えなさい。

問三 — 部②「緑色をした水」とありますが、それは何のことですか。文中より十字で抜き出して答えなさい。

問四 — 部③「僕が竹を建築にしばしば使うことと、この竹ヤブ体験は、きつと関係があるのでしょうか」について、次のⅠ・Ⅱの質問に答えなさい。

Ⅰ「この竹ヤブ体験」とありますが、どのような体験ですか。「く体験」となるように三十字以内で答えなさい。

Ⅱ「きつと関係がある」とありますが、作者が最も関係があると考えている建築は何ですか。次のア～エの中から、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 万里の長城 イ 万里の長城の脇の竹の家 ウ 浜名湖博覧会のゲートパビリオン エ 根津美術館のアプローチ

問五 本文中の **B**・**C** には、それぞれに三文字の言葉が入ります。それぞれ、文中より抜き出して答えなさい。

BとCの順序は、どちらが先でもかまいません。

問六 — 部④「気分の転換ができない」とありますが、どのような気分の転換ですか。

I 気分から、**II** 気分への転換」となるように、Ⅰは二文字・Ⅱは五文字で文中より抜き出して答えなさい。

問七 本文中の **D** には二文字の言葉が入ります。文中より抜き出して答えなさい。

問八 — 部⑤「生きた家」とありますが、どのような家が生きた家なのですか。次のア～エの中から、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大岡山の下の方にある、コンクリートの土の上に作られた家

イ 大岡山の上の方にある、竹ヤブの中に立っている平屋作りの家

ウ ビカビカして、インテリアは、ビニールクロスで張られているような家

エ 建てられたときはきれいだが、だんだんぼろぼろになっていくような家

問九 本文中の **a** **d** に入る言葉を次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ ようやく ウ そのため エ 一言でいえば

問十 — 部⑥「机の上に積み木を立ち上げるのではなく」とありますが、なぜそうしないのですか。四十五字以上五十五字以内で答えなさい。

問十一 本文中の **E** には三文字の言葉が入ります。文中より抜き出して答えなさい。

問十二 本文の内容について述べた次の文ア～エの中から、正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自ら建築家としての豊かな経験から得た知識を活用して、日本と中国の建築に対する考え方の相違点についてまとめている。

イ 建築家として歩んできた自分の半生を時系列に従って振り返ることによって、少年時代の体験と自分の建築との関係性を述べている。

ウ これまで自分が手がけてきた建築作品の持つ意図を説明しながら、それらの作品の動機となった自分の幼少期の体験を語っている。

エ 自らの作品で多用している「竹」のエピソードを切り口として、昭和と平成、日本と中国という時代や場所による建築の違いについて考察している。

二 次の問題に答えなさい。

A 漢字

問一 次の【 内と近い意味の熟語を、後の語群から選び、カタカナを漢字に直して答えなさい。

- ① 彼は【ひときわすぐれた】人材である
 - ② このケガでは仕事に【さしさわり】がある
 - ③ 故障した機械を【もとの状態に戻すこと】した
 - ④ 日頃の言動から、どのような性格の人かを【おしはかること】ができる
 - ⑤ 友人を夕食に【まねくこと】した
- 語群… シショウ スイソク ショウタイ ユウシュウ フツキユウ

問二 次の傍線部の熟語の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① あの人は怒ると、鬼のような**形相**になる。
- ② とても**風情**のある建物だ。
- ③ その話をした**意図**を読み取る必要がある。

問三 次のⅡ部の漢字と同じ読み方をするものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 頭角【ア音頭】 イ船頭 ウ陣頭 エ目頭【
- (2) 腕白【ア潔白】 イ白髪 ウ独白 エ白身【

B ことわざ・四字熟語・慣用句

問四 次の四字熟語四つの□に入る漢字を組み合わせて、別の四字熟語を作りなさい。

- ① □確無比 □鏡止水 □言壮語 □平無私
- ② 悪□雑言 付和雷□ 天変地□ 不協和□

問五 次のことわざ・慣用句の□に入るものとして**あざわしくなり**語を、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① (一字)に余る……………【ア手 イ口 ウ目 エ身】
- ② (一字)を売る……………【ア名 イ水 ウ油 エ顔】

問六 次の文章を読み、後の文法に関する問いに答えなさい。

【 人とはあまり口をきかない物静かな医者で、釣りにしか興味がないように見えました。 】

(限研吾『僕の場所』より)

右の文章の中で、動詞は (①) と (②) 、形容詞は (③) 、形容動詞は (④) である。

※全て、基本形を答えること。

問七 次の一文にはそれぞれアからエまでの中に一ヶ所間違った表現がある。間違っている部分の記号と、正しい言葉を答えなさい。

① 私は試験本番を迎えるにあたり、先生から応援の言葉をくださった。

② 彼は朝ご飯を食べてこなかった上に、いつものように激しく運動をしていれば、倒れてしまうかもしれない。